

岸田吟香について

生 まれ

岸田吟香は天保4年（1833年）4月28日に久米北条郡中坵和村（現在の久米郡美咲町栃原）で父、秀次郎、母、小芳の5男3女の長男として生まれる。

幼 少年時代

幼少年時代の吟香は、大きな体で活発な子どもであったという。幼い頃から神童といわれ、4歳の頃にはすでに「唐詩選」を暗唱していたことからいかに秀才だったかがうかがえる。5歳のとき、坵和の宝寿寺の住職が開いていた寺子屋で学び、坪井の大庄屋、安藤簡斎のもとへ学僕として住み込むことになる。吟香が坪井にいたのは、12歳から14歳までの2年間。この2年間で、坪井で学ぶものはないとみた簡斎は吟香を津山へ出し、はじめ永田孝平、次いで上原存軒に漢学を学ばせ、かたわら矢吹正則に就いて剣道を修めさせた。吟香が津山で学んだ期間はほぼ5ヵ年、その間津山郊外の高田村にある善応寺で私塾を開き、村の青年たちに四書五経や日本外史などを教えながら、勉学につとめていた。

名、号、別名

吟香は、いくたびか名を変え、号や別名をたくさんもっていた。幼名は辰太郎、太郎、達蔵、弥子麻呂、清原桜、東洋先生、墨江桜、墨江岸桜、岸吟香、岸太郎、岸国華、墨江岸国華、吟次、小林屋銀次、岸田銀治、岸田銀次、岸田屋銀次、京屋銀次郎、岸田朝臣桜、吟道人 等多くあるが、明治31年以降は、公式の文章などにはすべて「岸田吟香」と署名している。

吟 香の名前の由来

吟香という名前も陸放羽の「吟到梅花句亦香」という句からとったのではなく、口から出まかせに、銀次と申しますと言ったのがはじめである。太郎としたのも、大名のところへかかえられて、大名の息子に辰というのが居るから辰という字をとりのけて太郎とした。「ままよのぎん」と名前を変えたのも、気ままに暮らす方が一生の得と思いついてつけた名前。

●●● 吟香の主な業績 ●●●

和 英・英和辞書の編集・印刷 ●●

文久3年（1863年）、目の病気にかかっていた吟香は、津山藩の蘭学者、箕作秋坪に医師のドクトル・ヘボンを紹介され、横浜に行った。当時、ヘボンは語学者でもあり、和英の辞書を作ろうと考えていた。吟香のさまざまな身の上を知ったヘボンは、吟香の読み書きの力を知り、協力を求めると、吟香はヘボンの辞書に大変興味を持ち、熱心に辞書作りに励んだ。ヘボンと吟香は、その中で言葉の意味だけでなく、お互いの文化を学びながら、その仕事をしていった。

慶應2年（1866年）9月10日和英・英和辞書の印刷のためヘボン夫妻と上海へ出航。9月15日美華書館で辞書の印刷に取りかかり、吟香は仮名活字を作った（日本人初の鉛活字）。慶應3年（1867年）3月25日、ついに辞書が完成。吟香は「和英語林集成」と名付けた。

日 本で最初の邦字新聞の発行 ●●

元治元年（1864年）5月25日我が国最初の新聞「新聞紙」をジョセフ・ヒコ、本間清雄と3人で創刊。吟香は、通訳や貿易商をしていたジョセフ・ヒコとともに西洋の新聞の中から記事を選び翻訳したものを、本間清雄とひらがなまじりの日本文に作り直した。慶應元年（1865年）5月休刊中だった「新聞紙」を「海外新聞」と改題して再発行。半紙5～6枚の木版刷りにして月3～4回、横浜市中に配った。

横 浜～東京間の定期航路運行開始 ●●

慶應3年（1867年）9月末、上海より帰国した吟香は、アメリカ商人ヴァン・リードから江戸と横浜の間に定期航路をつくる計画を聞き、手伝うことになった。当時、交通が不便だったので、定期船「稲川丸」は大勢の旅客や貨物運搬のために利用されていた。明治元年（1868年）8月29日、政府が没収した「稲川丸」の差配となり、横浜・東京間の定期航路の運行を開始。その後、明治3年（1870年）に一万両で「稲川丸」を買い取ったが、明治5年（1872年）に新橋と横浜間に日本最初の鉄道が開通するとすぐに定期航路をやめて開拓使に売却し、青函連絡船に使用された。

日 薬「精錡水」の製造、販売を始める ●●

目の病気に掛かった吟香は、横浜でドクトル・ヘボンの診察を受けた後、ヘボンの診療を手伝うようになった。そして、ヘボンに教えてもらい、慶應3年（1867年）8月日本で最初の水溶性目薬「精錡水」の製造、販売を始めた。当時のあまり効き目のなかったねり薬やこな薬に変わる新しい目薬として国内だけでなく、中国各地でも売り出された。

横 浜新報・もしほ草創刊 ●●

慶應4年（1868年）閏4月11日横浜新報・もしほ草創刊。
8月22日「渡航新聞・のりあひはなし」創刊。

氷 製造販売業 ●●

キリスト教宣教師として日本にやってきたドクトル・ヘボンは、同時に医者でもあった。横浜に住み、医療活動を続けたヘボンは、医療にとって氷は大切なものだと思っていたので、はるばるアメリカから取り寄せていた。ヘボンから天然水による氷の製造販売業のことを教えられた吟香は、明治2年（1869年）春、中川嘉兵衛と氷製造販売業を開始。明治3年（1870年）冬、北海道函館で氷の製造を始め、明治4年（1871年）横浜氷室商会を設立した。

石 油採掘業に失敗 ●●

ドクトル・ヘボンと辞書の編集をしていくうちに、吟香は英語の単語の意味だけでなく、西洋文明の知識も多く学んだ。吟香とヘボンの会話の中で、越後の七不思議の臭水（くそうず）の話をしている時に、ヘボンからそれはペトロリウム（石油）で、アメリカでは精製してケロシン・オイル（灯油）を作り、それを輸出して利益を得ているという話を聞いた。石油のことを知った吟香は、石坂周蔵たちと相談、協同で石油会社をつくることを計画したが、明治2年（1869年）資金難などの理由により新潟赤田村での石油採掘業は実現することなく終わった。

東 京日々新聞の創刊、入社、活躍 ●●

明治5年（1872年）2月21日、桑野伝平らからの相談を受け、「東京日々新聞」を創刊。2月22日、「東京日々新聞」第2号から、吟香が上海で作った鉛活字が採用された（日刊新聞が鉛活字を使用した最初）。6月「郵便報知新聞」の編集に従事（2号～12号）。明治6年（1873年）9月中旬、「東京日々新聞」へ主筆として入社した吟香は再び新聞記者となり、わかりやすく事実を正確に伝える記事を書き、読者の評判を得ていた。

日 本最初の従軍記者 ●●

台湾で日本の漂流民が殺害されたため、台湾の出兵が決まると、吟香は早速従軍記者として従軍したい旨を都督府に願い出た。しかし、この願いは受け入れられなかった。そこで、軍の御用として台湾に渡る大倉組の手代に採用してもらい、西郷従道都督陸軍中將の黙許を得て、ようやく従軍することになった。明治7年（1874年）4月のこと。その従軍記事は名文であり世を挙げて喝采された。

盲 啞学校の創設者 ●●

江戸末期から明治初期にかけて、日本では大変多くの人々が目の病気にかかっていた。吟香は、目の病気をなくすために力を入れたり、目の不自由な人に文字を読ませたり、仕事を教えたりする学校をつくることを考えた。明治8年（1875年）5月22日、津田仙、中村正直らと「楽善会」を組織して訓盲院を設立。明治9年（1876年）12月20日、東京府庁へ出頭、訓盲院用地1万坪の下げ渡しを受けた吟香は、精錡水を売ったお金と津田仙らの協力により、明治13年（1880年）東京の築地に夢であった訓盲院をつくった。明治15年（1882年）2月13日、訓盲院授業開始。その後、言葉の不自由な人の入学もあって「訓盲啞院」となり、明治18年（1885年）11月31日、文部省の直轄となって校名も「東京盲啞学校」と改称された。

目 中友好に尽くす ●●

多くの知人、要人、文人との交流を通じ中国の文化の発展に尽くした。

雑 報の名手 ●●

吟香の雑報文は一般の人がその場の雰囲気を見なくてもわかるような文章であり名文といわれた。ご巡幸の記「風雨中箱根を越ゆるの記」は名文といわれている。福地桜痴が若い記者たちに語った言葉に、「文章は論文とゆうものはまことにやさしいものである。然るに記事文とゆうものは実に六ヶしいものである。自らその所在を目のあたりに見るが如く、また聞く如く書き表すのが記事文である。だから君たちはまず、論文を稽古するより記事文を稽古しなければならぬ。それには、この岸田吟香先生は実に名人だ」とある。

目 本語の平易化・口語体の導入 ●●

吟香は新聞などさまざまな記事を書いていくなかで、いままででない文章の書き方でその後に大きな影響を与えた。それまで日本の知識人の文章は漢文もしくは漢文体だったが、吟香は庶民のために口語体を使って、わかりやすく、やさしい文章を新聞などに載せた。

吟香の文章は口語体でない場合でも、わかりやすくやさしいものであった。慶応2年（1866年）辞書印刷のため上海に滞在中の日記「吳淞（う-すん）日記」に「ひらかな書にして、日本の町人百姓でも、職人でも、をりすけ、雲助でもよめるやうにこしらへるつもり也」と書いている。

広告の先覚者 ● ●

吟香は新聞を作っていくうちに、広告の方法として新聞を利用することを思いつき、慶應元年（1865年）「海外新聞」に広告を載せたのを始め、明治11年（1878年）には、広告専門の「広告日表（後に「広告日報」）」を創刊した。また、広告業として呼子をやとい、街角に人を集めてビラを配って歩かせたり、ときには吟香が広告主となることもあり、精錡水の大量広告は人々の注目を浴びた。明治12年（1879年）には新聞紙上に初めてマンガ入りの個人広告を出すなど、吟香は新聞広告を大々的に利用した最初の人だった。また多くの錦絵もある。

その他 ● ●

日本薬学会評議員、全国薬業組合会頭など、薬業会で重きをなし、阿片撲滅をめざして活躍。

● ● ● 日本で最初に生卵をご飯にかけて食べた人 ● ● ●

「明治初期の記者、岸田吟香翁」に翁（吟香）は毎朝、旅舎の朝飯に箸をつけず、兼ねて用意したのか、左無くば旅舎に云付け鶏卵三、四を取り寄せ食すだけの温飯一度に盛らせて、鶏卵も皆打割り、カバンから焼塩と蕃椒を出し、適宜に振りかけ、鶏卵和にして喰されたものだ。との記載があり、このことから日本で卵飯を、常食にしたのは岸田吟香といっても間違いないと思われる。

岸田吟香は、明治38年（1905年）6月7日に72歳で亡くなるまで、あまりにもいろいろな面で活躍しており、その事業も今の時代を先取りしたものといっても過言ではない。従って、激動の時代を走りぬけた先駆者のほんの一部しか紹介できないので、吟香の偉大さを十分理解いただけないと思われる。有名な岸田劉生は、吟香の四男であり、五男の辰彌は宝塚歌劇団の演出家でわが国のステージに初デビュー、モン・パリを送り出し、ラインダンスを考案した人です。